

いのししのかたち

丹羽 典生

民博 超域フィールド科学研究部



世界のいのししを集めてみました

展示資料を選定している筆者（右）

毎年、みんぱくでは年末年始に干支にちなんだ展示イベントが開催される。目下、その準備に追われているメンバーのなかに、探究心がくすぐられるいのししのキバの渦巻くかたちに魅せられた筆者の姿があった。

毎年恒例の干支展の開催に向けて、実行委員会は展示プランを今鋭意作成中である。来年の干支はいのしし。そこまずは本館の収蔵庫を探り、いのししにかかわる標本資料を総覧することからはじめた。厳密に言えばいのししとブタは違うが、今回の展示では、ひろく「ブタ」もいのししとしてとらえることにした。

実用品と装飾品

本館の収蔵資料のなかでいのししとかかわりのある資料は、全部で九三五件あった。皮、骨、尻尾、キバなどいのししの体の一部が素材として使われているものから、その顔や体の形象のイメージだけが使われているものまでさまざまである。前者のタイプには、釣り針、靴、盾、楽器、スプーンなど実用品もある。しかし大半を占めるのは、キバを使った装飾品である。後者はというと、いのししの人形や図案である。キバから体のかたちに至るまで、人びとはいのししに魅せられてきたのかもしれない。日本で作られている土鈴や絵馬には、見た目も楽しくかわいらしい造形のいのししの姿が見られる。もちろんそれ以外の国や地域の人形や仮面も含まれている。



パプアニューギニアの装飾品。鼻飾りなどに注目（1974年撮影）[X0327713]

このような標本資料の全体の構成も意識しつつ、今回の干支展は、キバから作られた装飾品を目玉のひとつとして並べることにした。わたしが調査でかかわっているオセアニア地域では、サメやクジラの歯などを首飾りにする工芸品が知られているが、そのな

かにはいのししのキバをたわめて丸いかたちにしたものも含まれている。直接的いのししのキバの装飾品が日常的に身にまといられている場面を目にしたことはないし、それらが儀礼で使われている場に出くわしたこともない。ただ自分がオセアニア地域の研究を生業としていることとあわせて、いのししのキバを装飾品として使用することに関心はあった。なに



①いのししの牙 [バヌアツ、H0137666] ②釣針 [サモア、H0145927] ③履物（農作業用）[三重県 伊賀上野市、H0035900] ④帽子 [インド、H0109185] ⑤装身具（婚資）[パプアニューギニア、H0124018] ⑥土鈴 [岐阜県 高山市、H0142006] (左)と [大阪府 羽曳野市 誉田八幡宮、H0142414] (右)

しろバヌアツ共和国の国旗には、いのししのキバが登場するくらいなのだ。他の国ばかりではなく日本でも時代をさかのぼれば、縄文時代の遺跡からはいのししの土人形やキバから作られた装飾品が発掘されているという。また実際に使用している雰囲気はわかるように一九七四年にパプアニューギニアで撮影された写真と上記のパプアツ共和国の国旗を壁面に掲げる。

もちろんいのししの人形や絵にも多くスペースをとってあることはいうまでもない。「めぐる」のセクションでは、日本の土鈴や絵馬と世界のいのししの人形などにわけて並べる予定である。かざったり、めだたり、両方をあわせてみることで人間がいのししのかたちをどのように認識して、形象化しているのか、みなさんの目で楽しんで頂ければ幸いである。

くまのくま

キバというと敵を突き刺すためにまっすぐで飛び出しているイメージがあるかもしれない。ところが装飾品として使われているキバには、ぐるぐる渦巻いているものが多い。同僚でいのししについての専門家でもある野林厚志教授によると、キバは自然に湾曲するのではなく、いのししが生きているあいだに人為的に力を加えて、たわめることで渦巻くという。オセアニア以外の地域の標本資料からも渦巻いたキバが出てくるのを見るにつけて、人間のこの形象への普遍的な関心について考えたい。

このように標本資料に魅せられて展示の準備が脇道にそれたりしながらも、一二月の開幕に向けて怒涛の日々が続いている。とはいいつつ閉幕は一月半ば。打ち上げはやはり季節的に牡丹鍋にしようかと考えている。